



# 伝統工芸をまなぶ

小学5～6年生向け



スーパーでお刺身をのせて売っている皿です。  
白いトレーに青で絵がらが印刷されています。  
何が描かれているでしょう？  
しかし、なぜ青い色なのかな？  
それにはモデルとなったものがあります。





今から100～200年くらい前に焼かれた「やきもの」の皿です。

山のふもとの家、水にうかぶ舟、空をとぶ鳥。中国の山水画が写されています。

高い火力で焼く「やきもの」には、熱につよいコバルト絵具(青)が多く用いられました。

青白の組合わせは、料理の色がひきたつので、食器に用いられました。もちろん刺身も盛られます。

駅で売られているお弁当の容器です。

森林資源の豊富な東北地方の駅で売られていました。

フタには木目が印刷されています。

この容器はなぜ丸い形を

しているのか？

それにはモデルとなったも

のがあります。





## ほんもの



秋田県の伝統工芸、<sup>おおだて</sup>大館曲げわっぱです（写真は60年くらい前のもの）。

うすく割いた杉の板をまるく曲げてつくります。

木は水分を吸うのでごはんを入ると、むれてべとつくことなく、また、固くもなりません。

内側は<sup>うるし</sup>漆が塗ってあるので細菌のはんしょくもおさえます。

写真は炊き上がったごはんを入れておく「おひつ」ですが、弁当箱もよく作られます。

マンゴープリンの容器でした。「やきもの」ですが、機械で量産したものです。表面をおおうガラス状の「まく」を釉(ゆう)と言います。釉でおおっていない素地には、わざわざうすいだいだい色をつけています。



この色の組み合わせは何に由来しているのでしょうか？



滋賀県の<sup>しがらき</sup>信楽焼です。

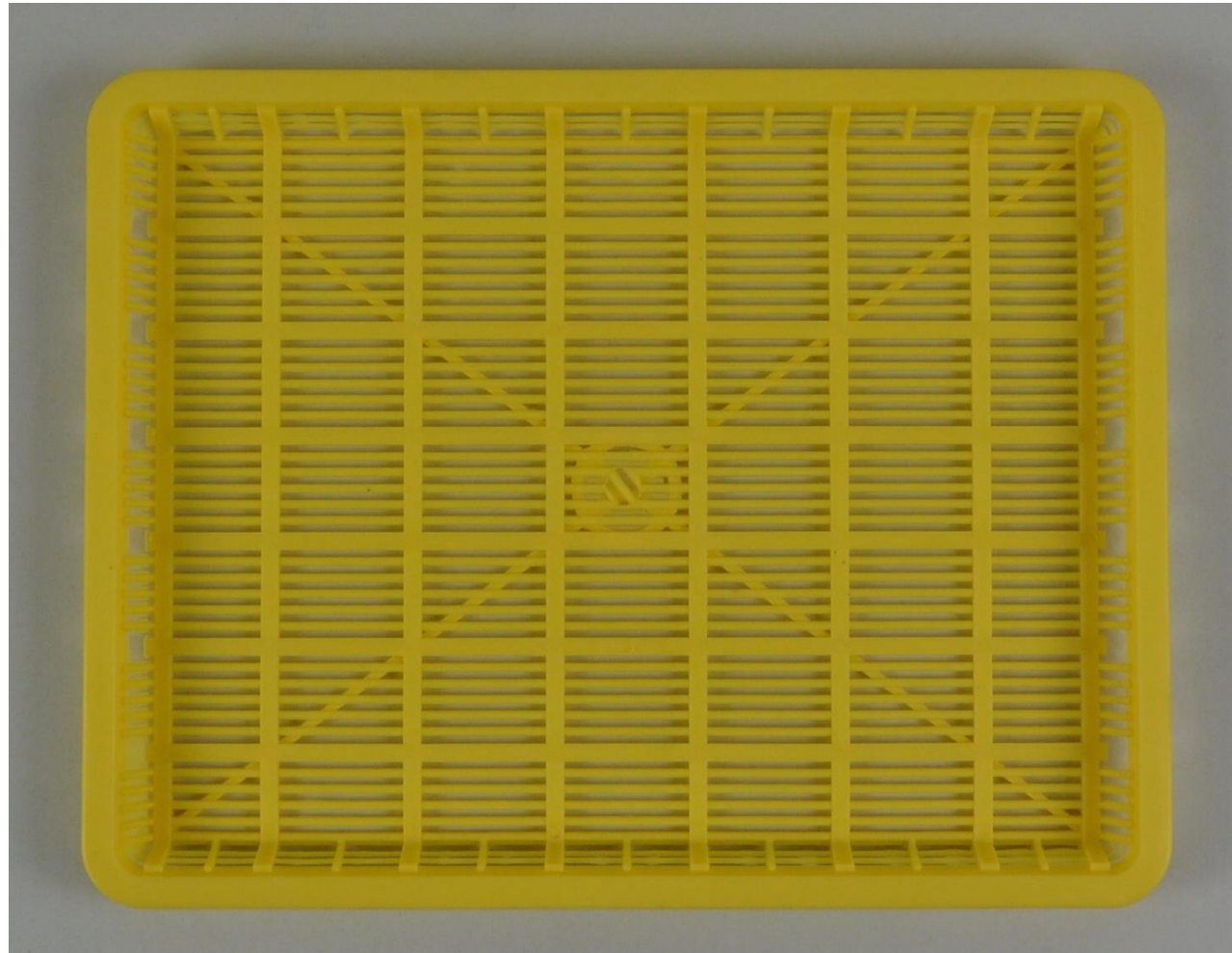
信楽のねん土を焼くと赤味を帯びます。

昔は木を燃料にして焼いたので、ふりかかった木の灰が高温でとけてガラス状に付着しました。

自然のせつ理を生かした、赤い土の感触と薄緑色の光沢の組み合わせは、今から400年ちょっと前の安土桃山時代の茶人に人気がありました。

その後、職人は木の灰をねん土に塗って焼くとガラス状に変化することを理解し、デザインとして木の灰を塗って焼くようになりました。





おそらく魚の干物をのせて売っていたプラスチック製の容器です。  
これは元々あった別の素材でつくった容器に似せたものです。  
その素材とは何でしょうか？



細く割いた竹ひごを  
あんだ竹細工です。

ぬれたものをのせると、  
水が落ちて品物が水  
に漬かりません。

軽くて、落としても割れ  
ない柔軟性があります。

容器としては、通気性  
がよいのも特長です。

竹ははんしょく力が強く、  
身近にたくさんありまし  
た。また廃棄しても自  
然に朽ちます。



ほんもの

これもお刺身のトレーです。「すすき」らしき絵と緑色が印象的です。  
なぜこのデザインが用いられているのでしょうか？





これは愛知県の瀬戸赤津焼あかづのお皿です。同じようなデザインは岐阜県的美濃焼にもあります。

今から400年ちょっと前に焼かれた織部焼のデザインを使っています。それまでにはなかった緑色を使い、絵は草花などを単純な線で表現しています。

その頃、お茶席の会食で用いる食器として人気があったデザインです。

昭和に入ってから、北大路魯山人という芸術家が気に入って、自分が作る食器にそのデザインを取り入れたため、世の中で人気が出ました。



ほんものの



コンビニエンスストアで売っているおそばの容器です。  
外側が黒で内側が赤というのにはわけがあります。



えちぜんしっき  
福井県の越前漆器です。

木の器に漆うるしの木の樹液が塗ってあります。

漆の液(漆)は空気にふれると半透明の茶色になります。

漆には色をつけられますが、昔は黒と赤でした。

「すす」を混ぜて黒い色、赤土をパウダーのように細かくして混ぜ赤い色をつけることができました。漆器は、長い間、その2色でデザインされてきたのです。

北陸や東北では、おそばを漆器の椀で食べます。



ほんもの

木の器はそのまま使うと汚れやすく、また、かわくと割れることがあります。  
漆を塗るとそれを防ぐことができます。塗り直しをすると半永久的に使えます。

ごはんや汁が冷めにくく、細菌のはんしょくもおさえます。美しい色つやがあり、  
肌ざわりもなめらかで、漆器は生活用品として人々に愛されてきました。

しかし、漆液はわずかずつしか採取できず、器の加工にもたいへん手間がかかるので、  
値段は高価です。また、一度に量を作ることもできません。

そのため、現在では誰もが日常に使う品ではなくなっています。







なじみがあるのは、こちらのプラスチック製のお椀でしょうか。

安価に大量に作ることができます。

プラスチックのお椀は人口の急増にともなう需要増にこたえるため、1950年代後半から普及しはじめました。

新品は見た目に漆器と見分けるのがむずかしいくらいですが、価格は漆器の10から20分の1くらいです。これなら手軽に使えます。

しかし、色つやや手ざわりはちがひ、長持ちしません。漆と同じ性質ではなく、限りなく似せて作ったものと言えます。



漆器はアジア各地で作られますが、16~17世紀にはヨーロッパで日本の品が知られたため、ジャパンウェアとも呼ばれるくらい、日本がほこりうる工芸品です。

色つやといい、使い心地といい漆器はすばらしい品です。しかし、生活に身近ではないがゆえに、近年では生産量も少なくなっています。このすばらしい生きた文化遺産を、われわれがどう未来に残してゆくかが課題となっています。

伝統工芸は世界にほこるべき日本の文化です。  
そのデザインの味わいは、安価なプラスチック製品やすぐに捨ててしまう容器にまで生かされています。それらは本物に似せたニセモノなのではないでしょうか？  
たとえ“ほんもの”でなくとも、なぜそのデザインがそうした容器に使われているのか、知ることに意味があるのです。そこには、まちがいなく、私たちの古くからの生活文化のありようが反映されているのです。

しかし、伝統工芸は材料が希少だったり、作るのに手間がかかることから、たいへん高価なものとなりました。そのため、私たちが毎日の生活の中で手軽に利用できるものとは必ずしも言えません。  
したがって、生産量は年とともに少なくなってきました。  
この祖先から伝わったすばらしい文化をどうしたら受けついでゆけるのか。今を生きる私たちの課題です。